回想法センター便り・7月号

平成２７年　６月３０日発行
発行　龍ケ崎市回想法センター
龍ケ崎市平台５－９－７
電話・FAX　0297－65－4443
Email pia-kaiso@etude.ocn.ne.jp

老後は穏やかに暮らしたい

我が家がいいのかな？

都市に高齢者が増え、都市に高齢者を受け入れる施設が不足するので、地方で都市の高齢者を介護させる案が国から出されました。地方からも、都市からも、様々な問題の声が上がっています。

高齢者の入居を誘う介護付き高齢者専用マンションの紹介をテレビやチラシ等で目にすることが多くなってきています。入居するには高額の為、慣れ親しんだ家を処分し、終の棲家として入居される方がほとんどです。「話が違う」と、入居してみて初めて気づくことも多く、気付いた時は、家を処分しているのでほかに行く手段もありません。悩み、苦しんでいる入居者の声が認知症家族会にも届いています。終の棲家として購入した家が「こんなはずではなかった」と、悩み、体調を崩してまで暮らすことのないように、入居者の声を吸い上げ、環境改善ができる相談窓口を、早急に、国や行政に作ってもらいたいです。チラシや、関係者の方の説明は良いことしか言いません。終の棲家を選ぶには、多くの方の意見を聞き慎重に選びたいものです。どんなあばら家でも我が家が一番かな。最後まで在宅で暮らすことができる、そんな社会を望みたいです。

人生の終わり方とは

アメリカでは、高齢になればなるほど、多くの高齢者が、終末期の対応について自らの希望を事前に考え書面にしているそうです。病院も、入院するすべての患者さんに「入院中に心臓が止まる、呼吸が止まるなどした場合には、どのような治療を希望しますか？」と、単刀直入に聞く病院が多いそうです。

母も、救急搬送し入院した時、明け方に、３人の医師が病室に来て「機能が落ちています。人工呼吸器に切り替えましょう」と。突然のことで冷静に考える余裕もなく「同意書」にサインをしてしまいました。幸い、母は、回復し人口呼吸器を外してもらうことができたので、今年「１００歳」を迎えることができました。あの時、人工呼吸器をはずせなかったら「母はどうなっていたのか？」と、想像するだけでも恐ろしくなります。この体験を機に「最後はどのように迎えたいか？」家族で話し合ってきました。「何が起きても在宅で過ごしたい」と、夫の希望通り、延命治療は一切せず「６１歳」の人生を在宅で家族が看取りました。本人、家族の意思がはっきりしていたので、在宅で看取ることができました。そこには、家族の希望を受け止めてくれた訪問医の支えは大きかったです。

お知らせ

おしゃべりサロンは、７月１３日（月）、７月２７日（月）
１４時～１６時、場所は、市役所地下食堂後

認知症家族会・「あおぞら」は、７月１日（水）、８月５日（水）
13 時 30 分～15 時 30 分、場所は、市民活動センター・多目的室
問い合わせ先　☎　０２９７－６５－４４４３